

第三版

轉向文學論

本多秋五

未來社刊

第3版 転向文学論

1957年8月20日 第1版第1刷発行

1964年6月20日 第2版第1刷発行

1972年2月20日 第3版第1刷発行

定価 750円

©著者 本多秋五

発行者 西谷能雄

発行所 株式会社未来社

東京都文京区小石川3の7

振替・東京87385番 電話(814)5521

印刷・暁印刷 製本・今泉誠文社

乱丁・落丁本はおとりかえします

第三版

轉向文學論

目次

捨子……………五

I

小林秀雄論……………一七
小林秀雄再論……………四九
『ドストエフスキイの生活』をめぐつて……………三七

II

窪川鶴次郎論……………二九
蔵原惟人論……………三六
宮本百合子論の一齣……………三七

転向文学と私小説	二七九
転向文学論	二八三
『暗い絵』と転向	三〇〇
共同研究『転向』の書評	三〇四
『海鳴りの底から』寸感	三五一

IV

文学は上部構造か	二五九
人間性は上部構造か	二六二
上部構造論についての手紙	二六六
あとがき	二七三

捨
子

不尺川のほとりをゆくに、三はかりなる捨子のあわれけに泣あり。此川の早瀬にかけ
て浮世の波をしのぐにたえず、露はかりの命まつ間と捨置けん。小萩かもとの秋の風、
こよひやちるらんあすやしほれんと、袂よりくひ物なけて通るに、

猿を聞人捨子に秋の風いかに

(『野曝紀行』)

高等学校の教室で『論語』の講義をきき、冉牛有疾の章で、冉牛は徳行の士で、レプラだつたのだと教えられて、「亡之、命矣夫、斯人也而有斯疾也、斯人也而有斯疾也。」という孔子の言葉に、解けぬ疑惑を感じた。同じころ、青木健作の作品集のなかに、おとなしい人妻がレプラの兆候を覺つて自分から姿を消す話を、優しかつた妻を思う夫の側から書いた短篇を読み、まるで自分がレプラの恋人を持つてでもいるかのように、責任のない刑罰を下すものに対して惱ましい憤懣を感じた。(当時まだ北条民雄は現われていなかった。) 天刑という言葉の残酷さにも惑つた。仕舞いには、美しい女を見ると惚れ、惚れると同時に、彼女が癩病だつたらと考えていた。大学に入つて、本郷の下宿の四畳半で『野曝紀行』を読み、「捨子」の句に同じ不合理を發見

して、ほとんど呻吟する思いをした。与謝野晶子が「強すぎる正義感」ということをいつているのを見て、正義感に強すぎるということがあるものかと反撥した。オリジナル・シンだろうと囁いた先輩に対しても、オリジナル・シンとはますます不合理じやないかと喰つてかかつた。

「捨子」の句には、おそろく二重の意味が考えられる。

第一は、上求菩提、下化衆生という、その上求菩提——求道途上にあるもののエゴイズムである。

姨捨山は、八幡と云里より一里はかり南に、西南に横をれて、すさまじく高くもあらす、かたくしき岩なども見えす、只あわれ深き山のすかたなり。なくさめかねしといひけんも、ことわりしられて、そゝろに悲しきに、何故にか老たる人を捨たらんと思ふに、いと涙も落そひければ、

倅や姨ひとり泣月の友

（『更科紀行』）

ならに

今日は親しらす子しらす、犬もとり、駒返しなと云北国一の難所を越てつかれ侍れば、枕引よせて寝たるに、一間隔て西の方に、若き女の声二人斗ときこゆ。年老たるおのこの声も交て、物語するをきけは、越後の国新潟と云ふ所の遊女成し。伊勢参宮するとして、此間までおのおおくりて、あすは古郷にかへす文したゝめて、はかなき言伝なとしやる也。白浪のよする汀に身をはふらかし、あまのこの世にあさましよう下りて、定めなき契、

日々の業因いかにつたなし、と物云をきく寝入て、あした旅立に、我くむかひて、行衛しらぬ旅路のうさあまり覚東なう悲しく侍れは、見えかくれにも御跡をしたひ侍ん、衣の上の御情に大慈のめくみをたれて、結縁せさせ給へと泪を落す。不便の事には侍れとも、我くは所々にてとまる方おほし、只人の行にまかせて行へし、神明の加護かならず恙なかるへし、と云捨て出つゝ、哀さしはらくやまさりけらし。

一家に遊女もねたり萩と月

(『奥の細道』)

これ等と比較すれば、富士川の吟の一入激越なのは明瞭だろう。「野さらしをこゝろに風のしむ身かな」(『野曝紀行』)の直線的な求道は、「さらしなの里、姨捨山の月見んこと、しきりにすゝむる秋風の」云々(『更科紀行』)にも、「行春や鳥啼魚の目は泪」(『奥の細道』)にも、そのままの形では見られぬものである。それは一回かぎりの無二無三のものだつたのだ。

だが、求道者のエゴイズムを超えたところに、この句のより言いあらわし難い意味があると思ふ。

いかにそや、汝、父に憎れたるか、母にうとまれたるか、父は汝を憎むにあらし、母は汝をうとむにあらし、只これ天にして、汝が性のつたなきをなけ。

(『野曝』前文のつづき)

「天」と「性」と——外と内との運命の問題がそこにある。運命の草叢を縫う道なき道の問題がある。一口にいって、生き行く道の問題がある。

『戦争と平和』の中で、ピエール・ベズーホフは、モスクワ陥落の際、フランス軍の捕虜となる。ピエールは、捕虜収容所でプラトン・カラターエフと知合いになり、この百姓出の老兵のうち「ロシア的な善良円満の具象化」を見出し、そこから再生の端緒を掴む。タルチーノの一戦を境として、ロシア軍は攻勢に転じ、フランス軍は退却を始める。退却するフランス軍に引率されてロシア人捕虜は西進する。落伍する捕虜は容赦なく銃殺される。遁走過程の必至である。病み疲れたプラトン・カラターエフは途中で動けなくなる。白樺の樹の根元に腰を下したプラトン・カラターエフは、眼に涙を浮かべながらピエールの方を見る。何かいいかげである。ピエールは心強くも見ない振りをして通りすぎる。後方で一発の銃声がかきこえる。銃口から煙の出る銃を抱えたフランス兵が傍らを駆け抜けて行く。犬の悲鳴がかきこえる。プラトン・カラターエフが可愛がつていたむく犬に相違ない。

「何という莫迦な奴だ。何を吠えているんだ！」とピエールは考える。

一種強勢を帯びたこの場の描写のうちに、悪とともに生を否定するのでなく、生とともに悪を肯定せんとしてトルストイが要した決断の量が滲んでいる。芭蕉の「猿をきく人」という発声のなかにも、同じものが看取されるのだ。「捨子の句」のみならず、「姨捨」の場合にも、「遊女」の場合にも、同種のものは底流している。そこに芭蕉の自我固執と自我救済があつたのだ。それがまた芸術至上主義者芭蕉の生き方でもあつたのだ。

人生の不合理に処する柔軟な心——こういうことを今日いうのはその時でないかも知れない。だが、娑婆苦の世界にあつて、現実と自己とを否定せぬために、「強すぎる正義感」の向うで耐えるということ——これぞ戦争中にわれわれが高価に購わされた言語道断の獲得であつた。芸術至上主義者は社会的苦悩に眼を閉じて可なりという意味ではない。内に圧迫するものなくして何の忍耐ぞや？ 自身に忠実であることが、より大きな眼から見れば、もつと有効な人間の使い道であることを信ずるまでだ。言語道断の獲得は言語道断である。われ等の獲得したものは、他人に対しても自己に対しても、公式でもなければ定則でもない。それぞれの瞬間における内部張力が是非を決定するといおうか。

かけはしやいのちをからむ葛かつら

かかる危き一線をこそわれ等は常に愛する。その鮮烈さをこそわれわれは尊重する。かかる危き一線を常に新鮮に求めたのが芭蕉の生涯であつた。

或時は倦て放擲せんことをおもひ、ある時はすゝんで人にかたん事をほこり、是非胸中にたゞかふて、これか為に身安からず、しはらく身を立てんことをねかへとも、これかためにさへられ、しはらく学て愚をさとさん事を思へとも、是かために破られ、終に無能無芸にして只此一筋につなかる。

〔『芳野紀行』〕

迷いを通じて、芭蕉は宿命を使命に転じたに相違ない。「四十年寝てくらしたる男」といい、「五十年の頑夫」と称した芭蕉は、楽天とともに五臓の神を破り、老杜とともに瘦せる純粹の芸術至上主義者であつた。病んで夢に枯野をかけめぐるまで、彼の生涯は芸術至上に貫かれた一生であつたが、それはまた彼に固有な意味で求道の生活に外ならなかつた。そのことによつて彼は社会苦を外から解決する民衆の友とはなりえなかつたけれども、切れば血の出る言葉を吐くことによつて、より内面的な形で民衆の心を心とする芸術家となり、そのことによつて彼は民衆の眞の友となつた。それが芸術と人生の一体化した詩人の生き方であつた。

芭蕉の句は、草の葉が天を刺すように鋭く、読むものの魂を一瞬にして虚空に抛げる。しかも尙、どこかに密室の空気を感ぜさせる。海外からの空気を遮断された戦争の数年間、われわれもその幾分かを味わわされたところの、あの同じものを煮返し焚き返し、その中から何か新しいものを発見せねばならぬ、閉ざされた時代の空気である。閉ざす力があればこそ、劈く力が感ぜられ、人を早く隠居化するものがあればこそ、それだけに若々しく迸るものの勢が感ぜられるとはいえ、われわれはもつと深く広やかな呼吸を、という要求を生理的に禁じえない。

志賀直哉の『灰色の月』は、われわれの問題の延長線の眞上に来る。「暗澹たる気持のまま渋谷駅で電車を降りた。」という結末は、精一杯のものではあるが、矢張り淡すぎるのだ。揚げるにせよ、抑えるにせよ、ここで尾緒を一振りしたらどうなつただろう？ 作品はそのとき見事な完成を粉砕されてしまつたのではなからうか？ 少くとも、この作品の枠内には納まり切らぬ

激動的な体験がわれわれにはある。

小林秀雄を囲む『近代文学』の座談会で、小林秀雄は美を窮極のものだと説いた。「一方の極端まで達したところで何も偉い事はない、同時に両極端に触れて、その間を満たさなければ。」
〔『パスカルの「パンセ」について』という彼自身の言葉を、いま何と考えるか？ と訊く。分析家の言葉だ、人間の生血を吸わねば生きられぬ亡霊はホーマーの昔からいるではないか、という。問いたいののは、耽美派の亡霊はいかなる生血を吸わんとするか、であつた。芸術至上主義の亡霊は、今日むしろコミニズムの生血を吸わんとするのこそ自然ではあるまいか？ 願わくば、自他ともに毒血を吸らざらんことを！

〔『近代文学』四六年第二号〕

